

「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇 (三)

——「江右遊日記」(其二)——

薄井俊二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード…徐霞客、徐宏祖、遊記、江西

はじめに

本稿は、明代の徐宏祖(一五八六～一六四一年)による「徐霞客遊記」の訳注である⁽¹⁾。

同書の巻二以降は、崇禎九年(一六三六)から同十三年(一六三九)にかけて、中国西南部をほぼ踏破した旅の記録であり、「西南遊記」とも称される。本稿ではその中から、第二巻「江右遊日記」の一部(崇禎九「一六三六」年十月十七日から、同二十九日まで)を訳出する。

紙幅の関係で、口語訳と簡単な語注のみとする。詳細な注釈は、別途インターネット上で公開する予定である。

江右遊日記の概要

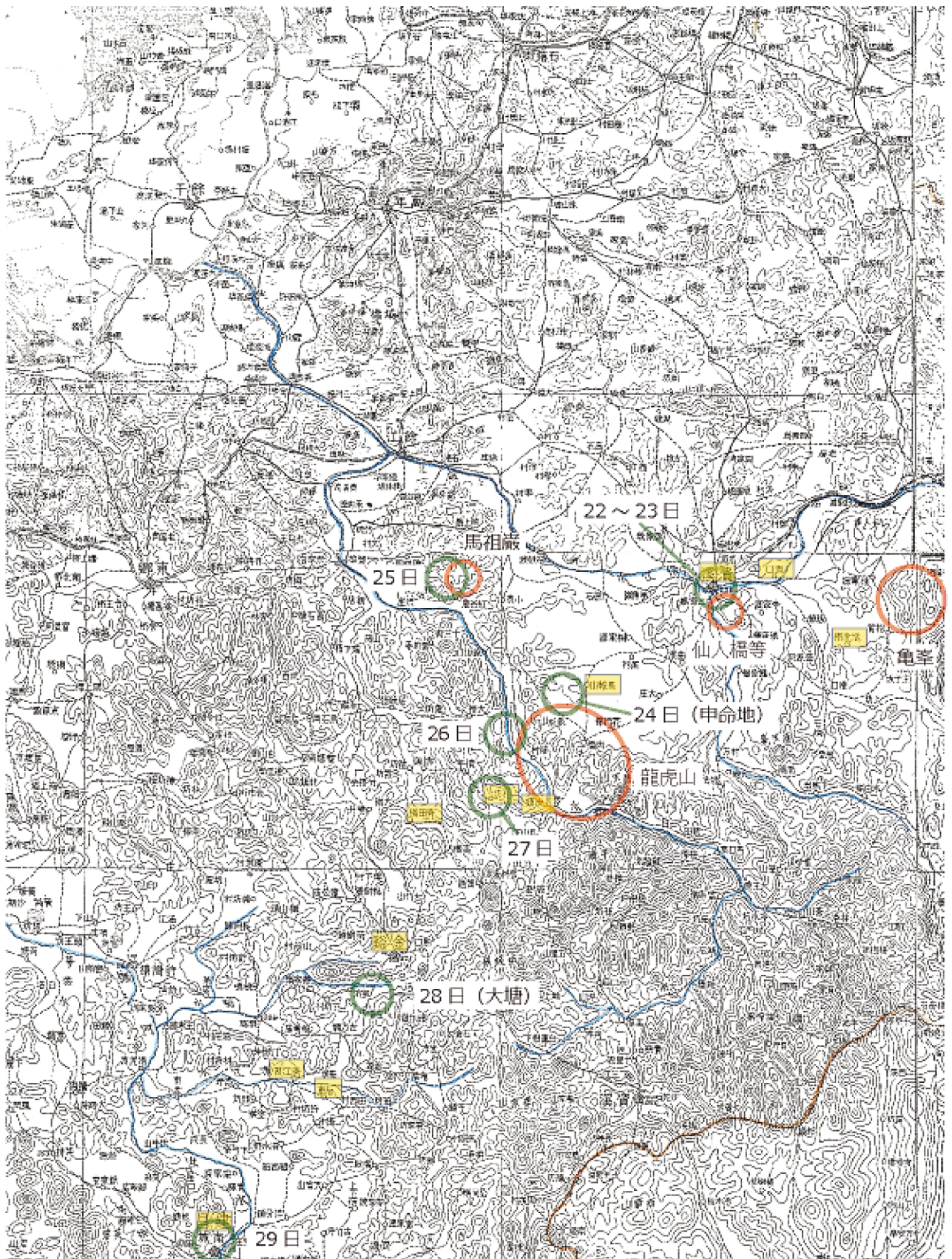
十月十七日に、徐霞客は陸路(輿輻)で江西広信府玉山県に入る。玉山県城から船で信江を遡り、上饒府治に泊。十八日は、膿傷ができたため、霊山の探索はあきらめ、船で鉛山河口まで。十九日は途

中で叫巖を探索するために一時上陸するが、その他は船で、弋陽県城へ。二十日、同行の静聞和尚に荷物を託して船で貴溪県城に向かわせ、自らは従僕をつれて、亀峯探訪に出る。二十一日には終日亀峯を訪ね歩き、二十二日に出発して、貴溪県へ向かう。二十三日、静聞と合流し、仙人橋などの貴溪県南の諸勝を探訪。貴溪県城に戻る。二十四日から(おそらく車を雇って)陸路で龍虎山一帯を探索し、二十八日に金谿県城を経由して、二十九日に建昌府治の南城県城に至る(本稿はここまで)。亀峯や馬祖巖の記述には、いわゆる「丹霞地貌」の特色を思わせる、露出した岩肌、横様に裂けた穴などが見える。

その後、新城県・南豊県で、麻姑山・軍峯山等を探訪、十一月十九日には撫州府宜黄県に至り、同二十七日には吉安府永豊県に入る。吉水県・吉安県・永新県を経て、崇禎十年一月一日から四日にかけて、武功山を探訪。同十日に、湖南に入っている。この間、陸路はほとんど輿輻で、山岳探索の折りのみが徒歩である。

*次頁の地図は、陸軍参謀本部陸地測量部編「東亜五十万分一地図」を加工したものである。





訳注

(浙江衢州府常山県の十五里という村落に泊)

十月十七日 鶏鳴に起きて朝食を摂り、再鳴に出発する。

五里で、蔣蓮鋪である。月が皎々として明るい。ここから南に転じる。山々が周囲を囲むようになってきて、そこに村落が見え始める。

また五里で、白石湾(不詳)である。朝日がやつと上り始める。

また五里で、白石鋪(白石鎮)である。ここから西に転じる。

また七里で、草萍公館である。「ここは常山県と玉山県との境である。」かつては駅が置かれていたが、今は公館に改められている。

(ここから江西信府玉山県に入る)

また西に三里で、南から北に延びる山脈の背である。この山脈は南の浙江江山県の二十七都の小箬嶺から発し、西に進んで江西永豊県の東側を通り、くねくねと曲がってここに至る。背の南と北には、円い峯が一对対峙しているが、越える背の部分は低くなっていくはなく、また狭まっついていて幅広ではない。背の西側に北から南に流れる溪流がある。その下流は、最後には鄱陽湖に入る。溪流の西には石が門のように重なっている。門の南北ともに、玉山県に属す。ここが東西の分岐点となる。

また十里で、古城鋪(古城崗)である。南に転じる。ようやく山間から抜け出す。

また五里で、金雞洞嶺(金鷄嶺)である。ここから西に転じる。

また五里で、山塘鋪(不詳)である。ここからりと山が開ける。

また十里で、東津橋である。石橋が高々と溪流の上に架かっている。

この溪流は北から南に流れている。その水源の山は、屏風を背負うかの如く高く聳えており、玉山県からは北のかた三十里以上のところにある。思うに、草萍から(西に進まずに)北へ進めば、西のかたこの山に対峙することになるのであろう。「この山は一名を大嶺といい、また三清山ともいう。」山の西は上饒府の徳興県である。山の東北は徽州府の婺源県である。山の東は衢州府の開化県と常山県である。思うに、浙江・南直隸・江西の三方面の河川は、すべてこの山から分流しているのである。私は以前、鳩埠(不詳)から裘裡(不詳)に行ったことがあるが、その折にはこの山の東南の谷に道を取った。

東津橋を渡り、西に五里で、玉山県城に東門から入る。

一里あまりで西門から出る。城内はとても荒廃している。しかし西の城外は店舗がたくさん集まっている。そこに川から降りる埠頭があるからである。東津橋の下を流れる川は、玉山県城の南を廻って西に流れる。ここに至って、船を浮かべることができる。

その時既に午後であった。川の水は涸れていて、搭乗できる大きな船はなかった。広信府へ向かう小船があった。そこで借りて乗せてもらうことにした。

(ここから船)

二十里で日が暮れた。船頭は月明かりの下で船を進める。

三十里で、沙溪のまちを過ぎる。

(ここから上饒県に入る)

また五十里で、広信府城の南門に停泊する。午前零時頃になっていた。沙溪のまちは、店舗がたくさんあり、川中に停泊している小船は百以上もあった。兩岸からは水車の音が途切れなかった。ただ

この地には盗賊が多いと聞いた。月明かりの下で、衣を掲げて川を渡っている者を見た。十分備えなければならぬ。(広信府の西に二十里のところに、川に面して石橋がある。その下流には九股松がある。根本は一本だが、幹が九つに分かれており、雲霄に届かんばかりに競うように伸びている。しかし上陸してそこを訪ねることはできなかった。)

〔注〕三清山：玉山県と徳興県の境にある道教の名山。最高峰である玉京峯で称されることもある。世界遺産に登録されている。山の西：底本は「山之陰」で「山の北」となるが、徳興県は三清山の西に位置するので、改めて訳した。

十八日 早朝に起き、昨日から引き続き舟を借り、鉛山県河口鎮へ向かう。

私は初めは、上饒県から北に向かって霊山に遊ぶことを計画していた。加えてその地にある北山寺(不詳)は廟宇がとも盛んであるとも聞いていたので、一度見に行きたいと思っていた。ところがにわかには膿傷ができてしまい、行動が思うがままにならなくなった。乗っていたのが河口鎮へ向かう舟だったので、やむを得ずそのまま河口鎮へ向かうこととした。広信は二度も訪れたのに、結局ここで留まって観光することはできなかった。

広信府治のあるまち(上饒市)は、信江の北岸に横たわっているが、城壁はさほど高くはない。しかし城外に広がる宅地や商店街と遙かに向かい合っている。これもまた山の中のまちとしては大規模なものである。

まちの東に霊溪が注いでいる。霊山から発している川である。まちの西には永豊溪がある。永豊県から流れているものである。

広信から西南に三十里下ったところに、円くて連なっている峯がある。山の色は赤く、崖がくねくねと曲がりわだかまっている。仙来山(不詳)という。

山の麓を過ぎるときは、まだ体を横たえており起きられなかった。二十里潭(不詳)を過ぎ、馬鞍山の麓に至るに及んで、振り返って仙来山を見ることができたが、もはや登ることはできない。

仙来山から雷打石(不詳)までの二十里の間は、川の両側に釜を覆したり、牛が寝そべっているかのような岩山が並んでいる。途切れたり、連続したりして、ただ山形が高峻を極めるだけではなく、表面には皺や模様がなくつるつるで、わずかな土や植物もない。山が途切れ、砂洲が入り込んでいるところになると、白い霜のあとや赤い楓の色が鮮やかで、村落の家屋と映え合つて石の合間から姿を見せ、まるで装飾を施されたかのようなのである。また二十里で、旁羅を過ぎる。

(ここは鉛山県)

ここから南に鷺湖山を望む。削ったように天高く聳えている。ここは私とその昔、分水関を経て福建の武夷山幔亭峯に至った道である。あれからはや二十年である。人の寿命などなほほどであろうか。しかし山野はまるで昔と変わってはいないというのに。短い人生をせいぜい楽しく生きようという思いにさせるものだ。

また二十里で、鉛山河口鎮に至る。太陽が沈んだ。流れが緩やかで風が逆風だったから、これだけしか進めなかったのだ。東南の分水関を源とする川が河口に注いでいる。鉛山県城を経て、ここに至つて大河に合流する。河口鎮は店舗が甚だ多く、大河の左岸に位置している。思うに、この両川が合流して初めて、大きな船を浮かべ

るのに耐える水量を得るのだろう。

〔注〕短い人生を：原本は「秉燭之思」。「人生は短いので、夜も灯火をともし
て楽しもう」という意。古詩十九首に「生年不滿百、常懷千歲憂。昼短
苦夜長、何不秉燭遊」（『文選』卷二十九）とある。魏文帝「与呉質書」
や李白「春夜宴從弟桃花園序」に「古人秉燭夜遊」として引かれる。

十九日 朝食のあと、貴溪へ向かう船を探し求める。得た船はと
ても狭い。他の乗客を待ち、しばらくしてから出発する。

この日の早朝は、雲が空に立ちこめ、しとしと雨が時に降る。
三十里で、西の方の叫巖に至る。溪流に臨んで石の崖がわだかま
つて突出し、下は深く淵の中に沈んでいる。青く澄み切った川の水は、
まるで染料を流したかのよう。岩の上には横穴が口を開け、岩の腰
のあたりを廻っている。穴は岩の内側を貫いており、あたかも、高
いところにある屋根に被われた隧道のようである。出入りする窓口
が皆はつきりと分かる。崖の上に「漁翁隱次」の四文字が彫られて
いる。崖の右のあたりは石段が波を洗っている。急いで水主に声を
かけ、舟を止めて上陸する。石柱が縦横に並ぶ中を隙間が突き通り、
岩の後ろに出ている。一本の小道をなしているのを見つける。そこ
で源を求めて更に入っていく。ところが、その谷の後ろは
峯々が取り巻いていて、樹木が鬱蒼と被っている。道を間違えた
と覚ったが、更に源を求めて進む。谷が廻り峯を取り巻くこの地では、
住民は低地を区切って池を作り、魚を養殖している。山の麓のあた
りに一軒の家がある。白雲や緑樹の中に見え隠れし、ぼんやりとし
た幽趣がある。速やかにその家に行つて問えば、そこは既に興安県
の境域だった。前面に対峙して立ち、伸びやかに続いて時に突出し
ている山がある。団雞石嶺（不詳）である。そこが鉛山県の西の外

れである。

団雞石嶺の西が叫岩寺である。叫岩寺は大きな溪流（信江）に臨
んでおり、左に「漁翁隱次」が彫られていた岩が突出し、右にも別
の岩が突出している。その右の岩の前には、円い峯が川の中に聳え
立っている。それはちょうど、揚子江における金山・焦山や、潯陽
江における小孤山とよく似ている。しかしこの峯の方が円く整つ
ている。これが印山と称されるものである。叫岩寺の後ろの岩は、
中が中空で、岩の両端が曲がりながら突き出しており、その間に一
軒の家屋を収めている。これこそ叫巖である。岩は寺院の陰になつ
ていて、景色のよさといえは、漁隱の岩であつて、ここではあまり
ない。

（おそらくここで再び舟に乗つたのであろう）

叫巖から西に十里で、弋陽県との境である。

（ここから弋陽県）

さらにまた溪流の右岸にきちんと対峙している山がある。屏風を
並べたように整っている。その上に寺院がある。その名前は分から
ない。船足が速いため、下船して登ることはできない。おそらくす
ばらしい景色なのであろう。

また三十里で、日が落ちた。西南の方角がようやく晴れてきた。
遙かに、一坐の峯を臨む、天の際まで突き通っているかのようである。
尋ねると「龜巖」であつた。私はおおいに心を惹かれたが、乗つて
いるのは貴溪へ向かう舟であるので、そこで舟を止めることはでき
ない。

さらに十里で、弋陽県の東の関に至る。ここで荷物を静閑和尚
に托して船ともに行かせ、自分は従僕の顧某とともに、東の関の

外の旅館に泊まる。明日の亀巖への一遊のためである。夜半に風が叫び雨も降ってくる。

〔注〕叫巖：清代の地方志などには記録があるが、近現代の資料には見あたらない。亀巖：亀峯ともいい、また圭峯ともいう。弋陽県城南にある丹霞地貌の山塊。世界遺産に登録されている。

二十日 早朝に起きる。雨は降り止まない。黎明に蓑をまとって出発する。

弋陽県城の東門から入る。この県城は南側に信江に臨んでおり、川は県城で曲がつて南へ向かい、城壁に近づいてからは支流が分かれて濠となり、下流で再び信江と合流する。

雨の中を県の役所の前を通り過ぎ、西に進んで西南の門に至る。そこでちょうど、亀巖出身の舒某が、地元へ帰ろうとしているのに出会った。そこで彼について行くことにして一緒に城門から出た。

濠を過ぎ、三里で信江を渡る。川の南に塔がある。弋陽の水の取り入れ口である。ここからはずっと低い山なりに行く。崩れた岩や石が、あるいは高くあるいは低く塊をなしていて、表面はつるつるで模様もなく、またわずかの土も被っていない。

ときに雨がよいよ激しくなり、ずぶ濡れになった。亀峯を遙かに望むが、全く何も見えない。ふと道の一端に一坐の峯が見えた。大体形状を備えているもののやや小振りである。舒某に問えば、羊角嶠（楊樹橋）であると分かった。

そこに至るところになると、遙か彼方に、門のように中頃から裂けている一峯を望む。門の南に回ると、圭のように石が空へ突き出している。これが天柱峯である。

天柱峯に至ると、道は突然南へと向かう。更に東に転ずると、堰

の横を通り過ぎる。堰の南側には水がたまって池をなしている。これが放生池である。池の水は、両岸の麓を洗っている。

崖の左なりに、石を削って棧道が作られている。ここが展旗峯である。上は険しい壁で下は澄み切った淵である。淵が尽きたところは竹や樹木が繁茂して、谷中を覆い隠している。両岸の崖からは飛瀑が代わる代わる注ぎ、玉の龍が乱舞するかのようである。すべて雨の神や山の神が、あつまってきたて幻想ぶりを競い合っているかのようである。

南へと左岸へ入ると、たちまち岸の最も高いところが見える。穴が空いていて光を通していて、まるで耳が頭についているかのようである。初めは白雲がこごったものかと思っていたが、近づいてみると石の隙間であることが分かった。

寺院に至ると、その庭に何人かの人が立ち上がったたり身を起こしたりしているのが見える。雲霧が弥漫しているため、姿がぼんやりとしか見えない。ときに雨脚がよいよ激しくなり、衣服から靴からぐつしよりと濡れてしまう。

貫心上人が自分の衣を脱いで、私のものと交換し、また火をおこして私たちを当たらせてくれる。心の中で考えた、この地の峯々の奇勝は、雲を押し開き霧を駆除しなければ鑑賞できないものなのだ。この日、結局日夜雨が降り続けた。そこで私は「五縁詩」を作った。振衣台の下の静室に泊まる。

〔注〕寺院：原本は方丈。おそらく亀峯寺もしくは瑞相寺と称されるものである。貫心：寺の住職だろうが不詳。五縁詩：詩の本文は残っていない。五縁とは、天台宗の準備的な修行の第一段階。

*二十一日分は、亀峯についての貫心によるレクチャー部分と、徐霞客の踏査記録とに分けて、さらに内容によって小分けして訳す。

《1》貫心による事前レクチャー(1)——山谷の内側——

二十一日 早くに起きる。とても寒い。雨が次第に収まり、峯々が皆姿を現す。ただ、寺の東南の絶頂だけが雲気をまとっている。

貫心和尚と朝食を食べ終わると、すぐに方丈の中庭に出て、亀峯の各地の名勝を指さしながらあげていく。

思うにここから真南にあつて独り高く聳えるのが寨頂である。頂上に鸚鵡の嘴のような石がある。そこで鸚鵡峯ともいわれる。今はまた老人峯ともいわれる。山頂に円い頂が突出している。下からそれを見上げれば、老僧が南に向いて袈裟を身にまとっている姿とそっくりである。「老人」という名はこれによる。振衣台に上つて平らに見ると、峯の先が次第に二つに分かれているかのように見える。双剣峯の下から見上げると、頂上に葉っぱが一枚つながつているかのように見える。

寨頂から北に下る山脈の突起は、一つ目が羅漢峯であり、二つ目が鸚哥峯であり、三つ目が浄瓶峯である。この浄瓶峯が北の山脈の最高峰である。四つ目が観音峯である。これもまた険峻である。これらが中の支脈であつて、北に展旗峯と向かい合っている。楠木殿がここにある。

老人峯南部から西で、最も険峻なものは畳亀峯と双剣峯である。畳亀峯は三本の石の柱が群がり立っているものの中のひとつで、峯の頭が直立して、双剣峯と並んでいる。最も高い頂には重なった石の塊があり、三匹の亀が重なっているように見える。畳亀峯の下の

裂け目は、南北に分かれているものは一線天で、東西に開いているものは摩尼洞となる。畳亀峯の後ろは四声谷である。谷の側から一声あげれば、声は谷をぐるぐると四回も響いて回る。思うに畳亀峯の東部にある水簾谷で、石の崖がぐるぐると取り巻いているので、声が回ってくるのであろう。

畳亀峯の東側で最も高いものは老人峯で、西側で最も近いのは含亀峯である。畳亀峯の下の所は、老人峯と含亀峯をつなぐ脊の分かれ目にあたつていて、そこから畳亀峯と双剣峯が天に向かつて伸び、含亀峯に遮られている。だからその隙間は姿を現すかと思えば塞がったりしている。塞がれば並んで障壁をなす。時として突然空の光を漏らすことがある。昨日白雲かと疑つたのはこれである。

この山の主峯は双剣峯である。これもまた畳亀峯と並び立つ。畳亀峯は下の方が三つに分かれているが上の方は一つになっており、双剣峯は頂が二つに分かれています。根元はつながつている。双剣峯の南に「壁立萬仞」の四文字が大書されている。これは老人峯を指している。落款は剥落しているが、南宋の朱熹のものだといわれる。

畳亀峯と双剣峯の二峯は、西南から延びてきた山脈の途中にあたり、東北に香盒峯と向かい合っている。かつて寺がここにあった。

西から北に向かい、左側に屏障を形成しているのが、一つ目が含亀峯である。その下に振衣台がある。平らな石が屏風の下に宙づりになっている。ここが摩尼洞・一線天に登る道である。

二つ目は明星峯である。北に双鰲峯に隣接し、南には含亀峯とながる。西側の峯の最高峰である。峯の上部に、星のような穴が空いている。

三つ目は双鰲峯である。峯の北は下つて清らかな淵に突っ込んで

いる。これこそ谷に入るときに通った、放生池の南崖である。

老人峯の南から東に、最も曲折しているのが、城塚峯と囲屏峯である。これらは東南部で層をなしている山々の後ろにあり、双鰲峯と向かい合っている。

東から北に、右側に重なる山々を並べるものは、伏せているのが轆頂峯であり、尖っているのが象牙峯であり、わだかまっているのが獅子峯である。これらは、四声谷の東側に連なり伸びていて、寨頂からの山脈はここで東北に転じ、また北からの脈と合わさって境となる。

平らに突き出しているのが香盆峯である。不思議な形で聳えているのが靈芝峯である。これは方丈の静室から見えたものである。斜めに張り出しているのが展旗峯である。東へ高く西へ低くなっており、南北は壁のように立つて、南へは澄み切った淵に突き刺さっている。これが四声谷に入るときに、棧道を下に彫っていたものである。この三つの峯は谷の北側に並んでいて、寨頂からの山脈は、西南に向かつてきてここで尽きている。以上で山谷の内部のことをすべて述べた。

《2》貫心による事前レクチャー(2) — 山谷の外側 —

山谷の外側についていえば、展旗峯の北にあるのが天柱峯である。これこそ昨日遠くから眺めて、圭のように先が分かれていたものである。その側は狗兎峯である。

獅子峯の南にあるのが卓筆峯である。囲屏峯の南では、深い谷の中に棋盤石がある。

寨頂の南にはまた朝帽峯がある。その峯は独り高く、寨頂の後ろ

に聳えている。私が弋陽の東で、船の中から遙かに眺めたのはこれである。しかし近づくると他の峯々に遮られて見えない。

また寨頂と朝帽峯の間に接引峯がある。

寨頂の西には画筆峯がある。思うに、寨頂から北に延びて下る山脈は、羅漢峯などである。その山脈が南に曲がり、西に巡り、並んでは屏嶂をなし、最後には聳龜峯の後ろに出るものがある。それがこれらの諸峯である。

岩の上に泉がある、これを水簾洞と名している。以上で山谷の外側のことをすべて述べた。

《3》貫心による事前レクチャー(3) — 山谷の概観 —

この山谷は、四面とも峯々が集まっていて、ひとつの洞天を成している。ただ西に向かつて峡谷が一つあり、両側の崖は壁のようにそそり立ち、一筋の川が中から流れ出していて、川沿いに道がのびる。

谷の南は聳龜峯の下にあたり、西は獅子峯の側にあたり、北は香盆峯と天柱峯の間にあたる。どちらからも、峯を越えわずかな隙間を通って始めてそこに至ることができる。まことに天地の間にあつて靈妙な景勝である。

その中の観音峯の一支脈は、老人峯の北から下っていて、ここで分かれて二つの谷を形成する。西の方は方丈静室があるところで、最後の所は振衣台と摩尼洞に至る道となる。東の方は、乱雑な草木で深く被われている。

《4》徐霞客の实地踏査(1) — 東外谷第一層

私は杖を手にして荊を掻き分けながら山に入った。まっすぐに囲屏峯と城塚峯の麓に至る。「餓虎趕羊」などの石を見上げるが、なんと本物にそっくりなのだろう。もし深く茂る雑草を刈り取り、石畳を重ねて梯子を懸けたりしたならば、固い扉が開いて、奥深くに隠されていたすばらしい景勝が余すところ無く明らかになったであろう。しかし残念なことに石が乱雑にころがり、荊が生い茂っているので、二度と中に入ることはできない。

そこで谷から出て、獅子峯の北に沿って、嶺を越えて南に転じる。いわゆる「轎頂峯・象牙峯」といった峯々を、谷の外から西に向かつて見ることになる。これらの諸峯もいずれも対峙し、重なりあつて立っている。その中に天に届かんばかりの一峯がある。あたかも筆を立てたかのように、殷浩が空に「咄咄」という文字を書いたことを思わせるものがある。卓筆峯と名付けられているのも宜なるかな。実際に見てみると分らなかったであろう。卓筆峯の麓は連なる石の岡である。その東にはまた石の峯が一筋ある、寨頂からめぐって北に伸び、西の轎頂峰や象牙峯といった峯々と囲って一つの谷を形成している。

私はその石の岡から真つ直ぐ南に進み、谷の底に至った。ここもまた石が乱雑に散らばり荊が深く生い茂っていたので、すぐに谷から出た。かくして西に象牙峯と獅子峯との間を越えて進む。その尾根は斜めに峙っており、足を置く余地も無い程である。振り返って谷の内側を眺めると、誠に別天地をなしている、これが東側の外谷の第一層である。

《5》徐霞客の实地踏査(2) — 東外谷第二層

再び外嶺なりに東に進み、更に南に転じて二里で、すぐに寨頂の後ろに至る。ここが棋盤石である。大きな石塊が谷の中に高く聳えている。その上は砥石のように平らで四周は切り立っている。座つたり休んだりできる。思うに、ここに昔隠居所があつたのだろうが、今や藪に被われている。神仙の遺物というわけでもあるまい。

その西南は朝帽峯で、西北は寨頂である。思うに囲屏峯の後ろにあたるのだろう。その外側の一支脈は朝帽峯の下から発し、再び廻つて北に向かい、また一つの谷を形成している。ただしその山々は互い違いにでこぼこして廻り立っており、谷内にあつた二つの支脈が石をむき出しにして切り立っていたのとは、様相を異にする。これが東の外谷の第二層である。

《6》徐霞客の实地踏査(3) — 北外谷

寨頂と朝帽嶺の間は、山脈の尾根が通るところに、南向きに大石が立っている。高さは数十丈あり、峯の頭部に懸かっついて、伝説の巨人である翁仲のように敵かである。あるいは接引峯といい、あるいは石人峯という。棋盤石からこの峯を望めば、知らず知らずのうち心がそこへ飛んで行ってしまう。ここから絶頂に至ることができるかと考え、荊を切り開いてまっすぐ嶺の下を窮めようとしたが、切り立った断崖絶壁で登るすべがなかった。そこでもとの道に戻り、獅子峯に至つて、香盆峯を過ぎ、靈芝峯に登り、天柱峯と狗兒峯が北の谷の中に植立しているのを望む。思うに展旗峯とその北の一つの峯とで、また廻つて一つの谷を形成している。これが北の外谷である。

《7》徐霞客の实地踏査(4) — 南外谷第一層

ほどなく展旗峯の西南から、まっすぐ東にその巔に上る。

そこから東南に朝帽峯の東側を眺める。そこには石がひとつ分かれ出ている。接引峯とよく似ているが、接引峯は隠れて見えない。

南に疊亀峯と双剣峯を眺める。一緒になって一枚の壁が廻っているかのようで、わずかの隙間もない。

展旗峯を下り、棧道を進んで西に出、淵の水に順って南に行き、双鰲峯・明星峯・含亀峯の後ろに出た。東にこの三峯を振り返ると、山の背には土があり、登れそうである。しかしこの道は選ばず、更に南に行き、東に入ると水簾洞への小道である。ここを進んで疊亀峯と双剣峯を越えて行けば、振衣谷の中に下る道である。しかしこれも選ばず、更に南に行くと、東へ上る道があるのが見えた。これこそ寨頂への道に違いないと思う。勇を鼓して登る。

二里で、西の方に疊亀峯と双剣峯が足下にあるのが見える。そこでもう水簾洞の上に出たのだと分かった。下に谷を見下ろすと、円い宝玉の塊のように三面が囲まれていて、ただ北側だけが、疊亀峯と双剣峯とあい対している。西側に外へ通じる隙間が空いている。しかし藪に被われているので、どこから入れるかは見えない。これが南の外谷の第一層である。

《8》徐霞客の实地踏査(5) — 南外谷第二層

崖の端に沿って更に上る。そうして左の道を棄てて右の道を取れば、東南の岡の上に、たくさんの石が乱雑にわき起こるかのようにあるのを見る。それはちょうど、一对の靈芝が並び立つようで、下の方は大きく、茎の上の部分は小さくなっている。下の部分はつな

がっていて中程に穴が空いている。石の上部は飛んだり舞ったりするような姿をなしており、まったく鑑賞しきれない程だ。

また一里上ると、頂を一つ登る。また右の道を棄てて左の道を取り、石の隙間をぬって登り、東南に転じる。その頂部分はぐつと盛り上がっている。

その北にまた別の頂があり、二つの頂が向かい合って峡谷をなしている。その峡谷は東南の山脊が過ぎるところから始まり、西北の水簾谷に延びている。山はここでふたつのエリアに分かれ、東南に山脊が過ぎる。梁のような石が一本、二つの頂の間に横たわる。梁のはずれは真つ直ぐな崖が切り立っており、とうてい登り得ない。脊の上に座って南の谷を眺め回せば、真下は崩れ落ちていて、底が見えない。ただ、向かいの崖の東西の端に、雲気がまとわりつき、緑樹から垂れ下がっているのが見えるだけである。どうやってそこに行けるかは分からない。これが南の外谷の第二層である。

《9》徐霞客の实地踏査(6) — 南外谷第三層

しばらく時を過ごし、引き返そうと帰路を捜し、ふと峡谷の北の頂を見る。すると石段が穿たれていて、峡谷の中から上に上られるようになってるのが見えた。そこで詳しく峡谷の南側の石の上を見てみると、そこにもまた同じような石段が見えた。そこで、ここでの道は、尾根ではなく、峡谷を通るものと分かった。思うに、こここの寨は、昔人が住まっていたところで、険しいところに梯子をかけ、中に道を通ったりしていたのであろう。今や道は草に埋没しているのだが、石段のあとだけが壊れずに残っているのだ。そこで、石段に沿って北へ峡谷を下り、さらに再び北の頂に石段を上る。

一里で、再び東へ向かつて最高の所を登り、そこから東南の頂に達する。するとたちまち接引峯と肩を並べ、朝帽峯と向かい合うことになる。しかし朝帽峯の東側に分かれて立っている石は、隠れてしまつてここからは見えない。そして朝帽峯といえ、四面ともどこともつながることなく険しく、登る手立ては全くない。そしてそれに隣接する接引峯は、そばだつ山脊の上に聳えており、両側はどちらも真つ直ぐに立つ石や乱雑な石塊でおおわれ、ただ下から登れないだけではなく、上から降りることもできない。そこから北に下つた谷は、棋盤石のあるところである。南に下つた谷は、朝帽峯から南に伸びた山脈が廻つて形成しているもので、どこからその谷に入つていけるのかは分からない。これが南の外谷の第三層である。

《10》徐霞客の实地踏査(7) — その他

ただ西側だけが外谷が無い。最高頂の北側は、東の方は囲屏峯と城塚峯に分かれ、西の方は鸚口峯に分かれる。そうしてそれら奇異なところは、下から見上げると高く聳えて奇勝を示しているが、上から見下ろすと深く険しくて全体を見渡すことができないことである。

このとき、既に空が暗くなつてきた。絶頂から四里進んで山から下る。東に向かつて双剣峯と壘亀峯の下に至る。そこで水簾洞に入ることのできる路を見つけるが、もはや真つ暗で何も見えない。そこで速やかに嶺を越えて、方丈に帰つた。

二十二日 早朝に起き、貫心のために「五縁詩」と「亀峯」五言二首・

「贈別」七言一首を清書する。

朝食の後、前日に続き振衣台を越え、上つて壘亀峯の下に至り、再び一線天を通つて東に進み、また北に進んで四声谷を通り過ぎる。思うに四声谷の壁に、東南に向う一筋の路がある。路の内側にはとても大きな石が重なりあい、石段を敷き梯子を懸け、そのまま楼閣を形成しているかのような様である。西北へ通じて外へ出られる。そのさらに西北には摩尼洞がある。真下に方丈に臨み、観音峯・浄瓶峯・獅子峯といった峯々に向かい合う。かくして嶺を下り、西南へ外谷に沿つて進み水簾洞に入る。この場所は三面を崖が囲い、天から螺旋状に廻り下る。そして北に壘亀峯・双剣峯と向かい合う。泉水は崖の東から飄い落ち、珠を飛ばし雪を捲くようである。これこそこの地の絶勝である。思うに亀峯の山々の奇勝は、雁宕山ですら及ばないものがある。しかし泉水の景観においてはやや欠けるところがある。その中でこの谷だけはただひとり、珠を飛ばし雪を捲いている。深い谷にあつて最も特異なところである。ただ洞についていえば、泉水と対になつてはいるが、しかし崖壁の底部に埋もれているに過ぎないのが残念である。ただ断崖が四面を囲んでいるので、その底の部分が洞と名付けられているに過ぎず、必ずしも一本の洞窟をなしているわけではないのである。

時に北風が泉水を舞い上がらせると、飛沫は中空にただよい、風の音も泉水の形もともに尋常とはことなる風景である。忽然として空が明るくなり、太陽の光が美しい崖壁や光る水を輝かせる。鑑賞にとらわれて立ち去り難い。それでもしばらくして鑑賞し、終えてから再び寺に帰り、食事を摂る。そして貫心と別れて出立する。

そして崖の棧道に沿つて西に進む。

十里で、排前(排上)である。

五里で、状元橋の北の分路亭を過ぎる。そこから南へ向かう路は、状元橋から黄源窰(不詳)に至るものである。その道なりに西に進む。

十五里で留口(流口)に至る。日暮れに溪流を渉る。溪流の西はもはや貴溪県の地である。この溪流は黄源から来ており、この地で大溪に流れ入る。そして町や店はすべて溪流の西側にある。そこでここに投宿する。排前から留口に至る間に、亀峯を振り返り眺めると、ただ朝帽峯が、天に突き刺さる一本の羊の角のように、厳めしく聳えているのが見えるだけである。これが西からの遠望である。弋陽県からの東からの遠望と、全く同じである。ただこの西からは、身を転ずれば、朝帽峯の旁らに、人間が孤独に立っているかのような石が聳えているの見える。これだけが東からの眺めとの違いである。

*二十三分は、内容によって小分けして訳す。

《1》貴溪県城まで

二十三日 早朝に起き、川の北岸に渡り、また西へ向かって進む。

(ここから貴溪県)

八里で、貴溪県城に至ろうとしたところで、川の南岸にひとつの橋門が空に架かっているのが忽然と見えた。城門やアーチ橋ではこれほど高く聳えるはずはないのだが、と思つた。そこで道行く人に尋ね、仙人橋であることが分かつた。つまり二つの山の間に大きな石が横たわっている自然物で、人工物ではないのである。私は大層気を惹かれ、すぐに川を渡りたかつたが橋がない。

急いで二里進み、貴溪県城に東関から入る。

二里進み、玉井頭(不詳)に至る。旅館で静聞を捜すと、まだ朝

食を摂っていなかった。そこでさつさと食事を摂らせ、一緒に県城の西南の門から出発した。川を渡って南に進むのが建昌府城への道である。そこで一輛の車輛を予約しておき、明日の早朝、南へ出発する手配をしておく。そして今日は東に戻って仙人橋を訪ねることとする。

[注]仙人橋：別名、月橋巖。自然の岩だが、橋が架かつたような姿をしている。

《2》旅館の主人の情報

貴溪の旅館の主人である舒龍山が言うことには、「この地の南山の景勝は一つではない。貴溪県城の正南門から出て、中坊渡を過ぎて一里で、象山がある。掛榜山とも言われているが、陸象山に関わる遺蹟である。仰止亭がここにある。その西南に二里で五面峯がある。峯の上には寺院がある。五面峯の麓には一線天がある。これらもまたこの地の最も優れた景勝である。その南に一里で西華山がある。下から廻るようにして登る。これらはどれも神仙の居所である。その北に二里で小隱巖がある。これこそ元は打虎巖と呼ばれたものである。小隱巖を出て二里で仙人橋がある。これが空中に懸かり、谷に架かつてできているものである。以上が信江南岸の景勝の概要である。そうして五面峯の西には南から北に流れて大溪に注ぐ川がある。そこには渡し船は無い。だから元の道を北に戻り、中坊渡で大溪を渡らなければならない」と。

[注]陸象山：南宋の哲学者陸九淵(一一三九～一一九二)。

《3》一線天まで

私はそのとき既に出かける気持ち盛り上がり、道程を変更することはできなくなっていた。そこで龍山には帰ってもらい、道々人に尋ねながら行くことにした。

かくして南に進み張真人の墓を通り過ぎる。ここにある石碑は、元の時代に勅命で趙松雪に撰文・揮毫させたものである。山を切り開いて岸壁となし、石碑をその中に囲っている。

また一里で小さな橋を渡る。その傍の岐路に従って東に溪流へ向かう。溪流はそのまま流れて五面峯の麓に至るものである。思うにこの溪流は江湖山を水源とし、花橋より下流でようやく船が通行可能となる。西北に六十里で羅塘に至る。さらに二十里でこの地に至って大溪に合流する。これは福建に至る脇道である。この溪流を通って北に運ばれるものは、紙や炭の類である。

ちようど、川岸に二艘の船がもやってあった。しかし船頭がいない。ほどなく一人の男がやってきたので、呼びかけて川を渡らせて、すぐにわれわれのために船を操らせた。

溪流を渡り東に一里で、峯の西北から山隘に入る。入って始めて分かった、この山はすべて石崖がわだかまり対峙したものであって、中頃は二つに裂けており、並んで立ち、山々の間隔も様々で、離れて立っただけでも形は同じであることが。

道なりに進みアーチ型の巖の下に至り、石段を踏んで登ると石の壇があった。両側の崖を掌のようにつなぎ合わせている。そこから南に下る石段は、まっすぐ潤水の底まで至る。そこから西に登る石段は、山頂へと繞っている。私は、南に下る道は一線天へ至り、西に登る道は五面峯に至るのだと考えた。そこで先ず西に向かい、峯

に登り石畳を踏むこと一里あまりで、五面峯の絶頂に至った。そこからは南には西華峯が、東には夾みたつ壁が、西には南溪が、北には貴溪峯が、それぞれ目の当たりに見えた。

しかし突然山雨が降ってきて、しかも僧侶が私たちを引き留めて点心を食べさせようとするので、早々に山を下る。

再び元の道を辿り、南に一線天まで下ると、両側を崖が夾んで聳え立っている。真南は峯の頂から下に裂けているもので、これが直峽である。峽谷の中で路が突然東に曲がり、崩落している石塊の間を縫って行くと、横峽に出る。どちらも上から下まで両側は壁がそばだち、(上を見上げると)曲がったり真つ直ぐだったりしているが、一本の線しか見えない。峽谷を東に抜けると窪地に出て、やつと人の世に帰ってきた心地がした。

窪地から南に進むと高い岩山や曲がった洞窟が見られる。そのあたりはずっと同じ景色だ。最南端で西華峯に至る。既に五面峯から眺めていたので、登らないことにする。

《4》小隠巖・仙人橋

そして転じて一線天を出、北へ嶺を一つ越える。

二里で、東に転じ、小隠巖に入る。この巖も一つの山をなしている、東西方向に廻っていて、南はつながっているが北は欠けて開いている。どの石も上の方は盛り上がり、下の方は縮こまり、裂けているところは平らな洞窟を形成している。小屋を作れば休息所ができそうである。

巖の後ろには、宋人の洪駒父の書があつて「宣和某年、徐巖から上り、二里で射虎巖を得た」と記されている。

私は、徐巖という名前が私の一族と関わりのあるものであることを、弋陽での船中で知ったのだが、ここに至るまですっかり忘れていた。壁に書かれている書が私を導いてくれた気がする。速やかに巖を出て徐巖のことを尋ね廻ったが、誰も知らない。そのうちに、小隠巖の東南三里のところに峨帽と称されるものがあることを耳にした。これが徐巖の別名ではないかと推測し、すぐに捜してみることにした。そして羅塘から来ている大道に従い、嶺を一つ越え、そこで北に転じて山に入った。そこは竹林が繁茂し、岩石が高く聳えている。しかし僧侶達が、岩の間に屋根を架けたり屏を作ったりしているのもので、本来の姿では無くなっている。さらにここが徐巖ではないことも分かった。

速やかに下山しようとすると、再び雨が激しく降ってきた。時に正午を過ぎていたので、巖の中で昼食とした。

昼食を終えると、雨も止んだ。仙人橋への道を尋ねると、たまたま知っている人がいて、「ここから近道がある。山に従って東へ進み、窪地を抜けて北にゆけば、四里で到達できる」と言う。その道を取ることにする。

道はとても荒れ果てていて、埋没したり現れたり、東や西に枝分かれしたりしている。あやうく迷子になるところであった。

しばらく進み一山越えようと、忽然と隆起して高く聳えるものごとでも近くに見えた。ところが谷を下ってそこへ行ってみると、ぼんやりとして見えなくなった。思うに眺めたときは近くに感じられたけれども、実際は崖や盆地に距てられていて、一旦視線を動かしてしまうと、それがどこにあるのかが分からなくなってしまふのだらう。

そうこうしているうちに、直ちに仙人橋の麓に至った。思うに、二つの峯の窪んだところに大きな石が高々と横たわっているもので、上の方は巻くように廻っていて、中程は裂けて門のようになり、両端の巖は盤踞して下って柱のよう、石橋の頂部分は平らですすべで、人の手によって研磨して作られた台のようである。石橋の東は崖沿いに登ることができ、西は三丈ほど離れて別の石柱があり、人が石橋を守って座っているかのように見える。私は先ず仙人橋の麓に至り、頂を仰ぎ見た。高く聳え、円く整っていて、数十丈以上のものに見えた。そして石橋の上に登って歩いてみると、広々として平らであった。天に架かる虹や、カササギに天の川に架けさせた橋の巧みさすら、これには及ばないのではないかと、思われる程のできばえである。

《5》徐巖探訪と象山

仙人橋から西に二里行き、象山に至ろうとし、例の徐巖について尋ねたが、どうしても分からない。

その後偶然に一人の老人に出会った。彼が言うには「私の家の後ろから南に行けば徐巖だ。元は徐巖と言ったが、今は朝真宮となっている。鬼谷先生が修道した場所であるが、今は荒れ果てて埋没している。明朝改めてでなければ行けない。今はもう日暮れなので、とりあえず象山に行くことならばできるが」と。

私は明日の早朝にはここを発つ予定だったので、静聞に無理を言っただが、谷に入るに従って道が分からなくなり、両側の岩壁が深くなってきた。荊の棘をも顧みず、真つ直ぐ谷底を窮めようとするの

だが、荊の真ん中で立ち往生しそうになる。ようやく谷を抜けると、道が分からなくなってしまった。思うにここは象山の東の第三の盆地であろう。

そこから西を望めば、また盆地が一つ見えた。そこでそこに入っていたが、道がなくなってしまった。時折、高く呼びかける人の声が聞こえる。しばらくして西に道があることが分かり、ようやくたどりつく。ここでは山谷の左側に高い崖が続き、一度そこに入れば幽深な山巖があり、外側に飛瀑が懸かっている。二人の僧侶がこの地に来て寄宿し始めたばかりであるのに出会う。彼らに聞いてみたが、ここが徐巖であるかどうかは知らなかった。しかしこここそ、いわゆる朝真宮なのであろう。

ほの暗い中から出て、また西に向かい転じて南のかた象山を目指す。このあたりは薄暗くなっても道ははっきりしており、両側の岩壁は前の方に突き出して、中頃の窪地はそれほど深くはないが険峻である。窪地の中に、並び立つ牌坊があった。内側に前後に重なる堂がある。祭る位牌が前の堂にあるが、建物は壊れている。後ろの堂は壊れていないが、位牌もなくからっぽである。堂を通り過ぎて更に入ってみると、山の崖のあたりから人の声が聞こえた。早速石段を登って尋ねてみると、岩の洞窟に人の家が設けられていた。

一人の男が松明を持って出てきた。祠を管理する楊という姓の者であった。彼は私を案内して、崖の右側から仰止亭へ登らせてくれた。仰止亭は崖の際に高く懸かっている、そこからの風景は、あたりは透き通るように美しく、周囲は翠が映え、高い峯を仰ぎ見たり、奥深い谷を俯瞰したりできた。まことにそこに留まり続け、帰るのを忘れてしまう景勝であった。楊某は、既に暗くなって久しく、夜を

告げる警戒の太鼓が鳴る時間になっていることもあり、渡し場に人がいなくなつてはいないかと心配してくれた。そこで暗い中を二里あまり、私を扶助してくれ、中坊渡まで送ってくれた。その間私に、彼の父親はもう八十八歳だが、いまだに食事が進む健康家であることなどを話してくれた。まことに親孝行で、礼儀正しく親切な人物である。溪流の反対側の船頭に声をかけ、川を渡つて南門から貴溪県城に入る。

一里あまりで貴溪県城の舒龍山の宿にたどり着き、宿す。

今回の遊覧は、石壁の中に徐巖の名前を見いだしたり、暗くなつた中で三つの峡谷に足を標したりした。溪南の景勝の地は余すところ無く観覧できた。中でも仙人橋と一線天の二つの奇勝は、今回の遊覧の中で最高であるのみならず、私がこれまで見てきた景勝の中でもトップクラスのものであった。

二十四日 朝食の後、予定通り貴溪県城の西南門から出て川を渡り、車夫を待つ。しばらくしてようやく出発する。既に午前もかなり過ぎていた。

南に十里で、新田舗である。そこは次第に開けていて、ちょうど西華山の南にあたる。巖々を眺め回すと、ごつごつとして並び立ち、一連の山脈をなしている。高い低いはあるものの、切れ目はない。

また十里で、聯桂舗（桂店部）で昼食を摂る。

また二十里で、馬鞍山を通り過ぎる、ここは横石舗（不詳）である。ここから再び山谷に入る。

また四里で、嶺を一つ越え、下つて申命地（不詳）に投宿する。この場所は、南に応天山と向き合っている。張真人のいる上清宮へ

向かうには、ここが出発となる。「申命」というのは「応天」と対になってるのである。

この日の夜、旅館の主人の烏という姓の者が、私のために次のように言う、「ここから南に直接上清宮に行くならば二十五里である。また西に仙巖に行くならば、ただの二十里である。もし先に上清宮に行き、その後仙巖にまわるならば、それもまた二十里である。だからまずここからは仙巖に向かい、上清宮を後回しにする方がよい」と。私はよい考えだと思い、それに従って計画を定めた。つまり明日は、静聞君には荷物を積んだ車輛とともに直接上清宮へ行つて私を待つてもらい、私はと言えば、軽装で顧僕だけを引き連れて、西に脇道を通つて仙巖に向かうというものだ。すると主人が更に言う、「仙巖の西十五里に馬祖巖がある。〔そこは安仁県の境域になる。〕その巖は甚だ優れた景勝であるが、仙巖を先にと少々迂回になる。直接馬祖巖に行き、転じて東に進んで、仙巖、龍虎山と歴訪し、最後に上清宮を訪ねるのがよいだろう」と。私はますますよい考えだと思つた。

二十五日 黎明に朝食を摂り出発する。雨がしとしと降り、止まない。

とうとう静聞君と別れる。彼は車を駆つて南へ進み、私は徒歩で西へ向かう。

四里で、章源（莊原）に至る。

また四里で、小さな峠を越え、桃源（桃源熊家）に至る。

また小さな峠を越え、二里で石底（石壁桂家）に至る。川を二度渡つたが、いずれも橋が架かつていた。

三里で、蓮塘（蓮塘）に至る。

小さな峠を越え、二里で、橋を渡る。

また二里で、鐵鑪坂（天祿坂？）である。

また三里で、香爐峯を通り過ぎる。この峯は三層に重なっており、南面は上から下まで真つ直ぐ裂けており、中程に窪んだ場所がある。仏者の庵がある。そのときちようど、雨が大層降つてきたので、登るのはあきらめた。香爐峯の西側は、安仁県の東の境である。そこからは饒州府の境域である。

（ここから饒州府安仁県）

三里で、簡堂源（不詳）である。

一里ほど行くと、雨足が狂つたように強くなってきて、着物の中も外もぐつしよりとなる。

三里で、新巖の麓を過ぎる。しかし巖が上にあるはずなのにどこなのか分からない。新巖の東の峡谷から入り、北に向かうと、西側の崖の麓に岩がたくさん横たわつていて、上には飛瀑が交差してして注いでいるのが見えた。そこで道を間違えたのだと覺つた。そこで巖の陰で雨を避けることにし、持参した橘柚を剥いて昼食とした。

そののち、顧僕をやつて北側を探索させたが様子が分からない。再び引き返し南側を探してみると、南の崖のところに竹林に被われた人家があるのが見えた。そこでそこが馬祖巖で間違いないと判断した。速やかに峡谷を出て、その巖に向かう。巖は高く聳えてはいるが、山の中腹に蟠っている、そして石質は粗雑でもろく、洞窟も偏平なもので、曲がったり透き通つたりという趣は無い。そのとき覺つた、これは新巖であり、旧巖ではないことを。加えて、そこにいた僧侶達が食事を用意してはくれたものの、その意中を察するに、

我々が逗留するのを迷惑がっているようであった。そこで私は速やかにそこから出て、さつさと山を下りた。

かくてまた雨の中を徘徊し、西に一里で、転じて北に峡谷に入る。峡谷の入り口には巨石がごろごろとしていて、高くまた低く蟠り、対峙している。生い茂る樹木やまとわりつく古い藤が、巖の上を鳥籠のように被い、甚だ雅趣がある。峡谷から入ると、崖が東西に並び立ち、北の方はつながっていて、南に開けている。開けているところが峡谷の入り口で、閉じているところが谷の底である。

馬祖巖は左の崖の半ばに位置していた。すなわち新巖の背面に当たる。そこに横様に裂けた洞窟は、ちょうど新巖にあったそれと同じである。しかしその洞窟のあたりには僧侶たちが二手に分かれて居所を定めていた。そして洞窟には犬・豚・牛・馬をいれた囲いがいっぱいである。私は、峡谷の底から馬祖巖に登り、南に上ってきた。そのときは雨がまだ止んでいなかった。そして馬祖巖の下を行くときには、玉のような水しぶきが外へ舞い散り、玉のような飛瀑が目の前できらきらと輝いていた。上を振り上げば、重なる巖々や洞窟などの上に、欄干や柵があつて空に連なっているよう見え、すばらしいところだろうと思つていた。ところがいざ登つてそこへ来てみると、臭気がひどくて近づくこともできない。要するに家畜どものねぐらであり、人が生活する場所となつていたのである。家はちつぽけなあばらやに過ぎず、まるで牢獄のように黒々としている。

その時私たちの衣服はひどく濡れていて、空も暗くなつていた。(そこで一宿を頼もうとしたが)南の房ではちょうど人々を集めて法事をしていてとかで、来客を断つた。北の房もそれに倣い、泊めてくれない。既にあちこち徘徊していて疲労もたまり、寒さも耐えられ

ないほどになつていた。そこで無理を言つて、石造りの小屋の中で眠らせてもらうことになつた。顧僕に命じて持参した米と炊飯器具で煮炊きをさせようとした。ところが僧侶達は、煮炊きに必要なお薪はないという。そのうちこちらの細米と交換で、粥を手に入れた。しかしその粥といえ、薄く米粒の姿が見えないほどであつた。

二十六日 黎明に起き、また米を炊こうとした。しかし僧侶らは薪をくれず、こちらの細米と彼らの作る粥とを交換しようという。やむなくとりあえずそれを食らい、さつさと出発する。

以前の通りに、北側の山がつながつているところから下り、顧僕に先に峡谷の入り口から外へ出させておき、私はひとりで転じて西の崖に登る。ここの巖も横に裂けること馬祖巖と同じだったが、深さはそれほどでもない。しかし、馬祖巖のように穢臭なもので満たされていることはなく、清浄である。巖の端から真つ直ぐ南に進む。路の端はどこも削り取つたように険しく、巖のはずれに至ると、岩壁が切り立っており、高さで険しさのあまり、とても下を見ることができない。

突然、峡谷を突き通つている洞窟があつた。そこを通つて西に行くくと路が二つに分かれていた。一本は崖沿いに北に向かい、もう一本はやはり崖沿いに南に向かう。両側の崖は壁のようにそそり立ち、上の方は一本の線をなすばかり。その線は東側の崖の下に至り、再び分かれてそこに巖をなす。そこでも馬祖巖のように横に裂け目が入つてはいるが、清浄幽遠で、その趣と言えば天地程の開きがある。

巖の外側の崖とそれに向かい合う崖とは、双方とも下の方には百仞も深さの谷をなし、上の方には千尺の高さで天を刺す。それでい

てその間隔は一尺程しかない。そして中間は横に裂ける洞窟が、重なる樓閣のように深遠に横たわる。ただ、極北部分だけが豁然と開いていて、外境へ通じている。その開けたところは太陽が照らして明るいが、土地は険しさを増しており、削り取られた崖やそそり立つ壁があり、とうてい上つたり下りたりはできない。まことに自然の生み出した幽遠険阻の地で、これぞ「別天地」というべきものである。

再び引き返し、さきほどの洞窟から出たの道が分かれている所に戻つて来た。その上を振り仰ぐと、平らな石が飛び出していて、上に登れそうなのだが、あまりにも高いので難しかった。そこで南の道から峯に沿つて上つてみると、高く聳える高殿のように巖が聳えており、やはり登るすべはなかった。これもひとつ別天地を開いている。

だいぶ長い間、顧僕を峡谷の下で待たせていた。そこで巖を突き通っている洞窟を通つて、そのまま東の方に崖の端まで行き、峡谷の入り口に下る道を捜したが、見つからない。元の道を崖沿いにずっと引き返し、谷の北の山がつかつているところまで戻つたところ、顧僕は私をじつとみているだけで、まだ峡谷から外へ出ていなかった。再び大声で声をかけてそこに至つた。

そこから東南に四里で、南吉嶺を過ぎる。遙か東に山々が乱雑に続き、翠が帯をなしているのが望見される。一番北に並び聳えるのが、排衙石である。最も高い。その南に斜めに突き出しているのが仙巖である。最も秀麗である。そして南吉嶺の下のとこに近づいて見ると、平らな耕地の中に一本の石柱がそそり立ち、その四面は削い

だように険しいものがある、礪石(金槍峯)である。最も峻峭である。峠をくだると、東から大溪が流れてきて、嶺の麓まで迫っているのが見える。この溪流は瀘溪から分かれて、上清宮を経由してここに下つてきたものである。

かくして溪流の北岸を遡る。

東南に四里で、礪石の下に至る。その石を見上げればそそり立ち、上に伸びるに従つて広がっているが、それでもいよいよ険しくなつており、独立した柱が天を支えているかのようだ。その下に礪石村がある。ここは安仁県の東南の境である。

(ここから広信府貴溪县にもどる)

溪流を渡るが、その南は瀝水である。溪流沿いの山の上に民家が数十戸ある。これらは貴溪县に属す。

また東に五里で、排衙石の西に至る。ここが漁塘である。漁塘の民は粗紙を造るのを生業としている。東に大溪に臨んでいる。

溪流沿いに西南に一里行くと、蔡坊渡である。ここに止宿する。

二十七日 蔡坊で溪流を渡る。

東に一里で、龍虎観(正一観)である。観の後ろに一里で、水簾洞がある。

龍虎観の後ろの山から出て南に五里で、蘭車渡(蘭車劉家)である(ここで川を渡る)。

さらに三里で、南鎮宮(不詳)である。

そこから北に行き東に転じて一里で、溪流を渡る。そこが上清街(上清鎮)である。この町はとても細長い。

東に一里で、真人府(天師府)である。

そこで南に溪流を渡り、五里進むと、峠を一つ越える。そこは胡墅（不詳）という名である。

西南に七里で石岡山（不詳）という、金谿県の東の境界である。ここから撫州に入る。

（ここから撫州府金谿県）

また三里で、淳塘（不詳）というところ。

また五里で、孔坊というところ。ここは住民の姓がみな江という。ここに泊まる。

〔注〕孔坊：「金谿県地名志」では、孔氏は山東曲阜から移転してきて、五十五代を経ているという。また「墓碑銘」を引き「宋元豊壬戌年（一〇八二）、江仁彰從福建光澤麻石徙此」という。徐霞客が、この村の人は姓がみな「江」だというのに符合する。

十月二十八日 孔坊から三里で、鄭陀嶺（不詳）である。

さらに七里で、連洋鋪（連洋識）である。

さらに十里で、葛坊である。

さらに十里で、青田鋪（不詳）である。「石梁水がある、鄧埠（不詳）から流れてきている。」

さらに十里で、茅田（不詳）である、ここから撫州府へ行く道がある。峠道の一つ下ると、五里橋である。川の水はここから西に許灣橋（許灣鎮）に向かう。南に庵があり、その旁に樓閣がある、迎送の場所なのだろう。

さらに東南に進み金谿県城に入る。県城は東西が二里である。東から入り西に出る。県城の北門は撫州府へ行く道である。

県城の東北に黄尖嶺がある。これが金を産出するところである。「志」にいう金窟山である。「県城の東五里にある。」その西は茵陳嶺

（不詳）である。西に向かって山崗が延びている、五里橋の北の分水嶺となっている。

金窟山の東南にあつて、県城の南をめぐる山は、朱干山という。「つまり翠雲山である、そこには翠雲寺がある。今は朱干という。」

金窟山・茵陳嶺から伸びて、北東南の三面から県城を囲っているのが、いわゆる「錦繡谷」である。西南方面だけがちよつと欠けていて、朱干山に沿つて西に流れる小河川がある。それは許灣橋まで下つて、やつと船を浮かべられるものになると言う。

朱干山の南に、高く聳える山がある、それも亦た東北より廻つてきて南に伸びる。劉陽寨（不詳）と牟瀾嶺（不詳）である。その東は瀘溪である、その西は金谿の大塘山（不詳）である、おそらく「志」にいう所の梅峯（不詳）であろう。「さらに南には七寶山（不詳）がある。」

二十九日 大塘より出発する。大塘に向かい合っているものとして、東に牟瀾頂の大山がある。

南に十里で、南嶽鋪（不詳）である。

又た西南に十里で、賈源（不詳）である。

又た五里で、清江源である。

（おそらくここからあたりから建昌府南城県に入る）

江に沿つて西南に五里で、後車鋪である、ここで昼食を摂る。

又た南に十里で、界山嶺（不詳）である。「一名韓婆寨ともいう。」

嶺を下り二里で、瀘溪の分道である。

又た二里で、大坪頭である。川の水はここから南流に変わる。

又た四里で、横坂鋪（不詳）である。

さらに五里で、七星橋（不詳）である。
又た五里で、潭樹橋（不詳）である。
さらに十里で、梧桐隘（不詳）である。

掲揚（不詳）には渡場が無い、建昌府城の東門に至り、投宿する。

（「江右遊日記」 未完）

注

〔1〕 本稿に先立つものは次の通り。

「徐霞客遊記訳注稿——名山遊記篇（一）」『遊天台山日記』 『埼玉大学国語教育論叢』 第十四号、二〇一一年

「徐霞客遊記訳注稿——名山遊記篇（二）」『嵩山日記』 『埼玉大学国語教育論叢』 十五号、二〇一二年

「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（一）」『浙遊日記』（前半） 『埼玉大学紀要』（教育学部） 第六十一卷第二号、二〇一二年

「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（二）」『浙遊日記』（後半） 『埼玉大学紀要』（教育学部） 第六十二卷第一号：投稿中

参考文献等

● 訳注類

朱恵栄校注 『徐霞客遊記校注』 雲南人民出版社、一九八五年（底本）

朱恵栄等訳注 『徐霞客遊記全訳』 貴州人民出版社、一九九七年

黄坤注譯・黄志民校閲 『新譯徐霞客遊記』 三民書局、二〇〇二年

● 参考文献

○ 明清地方志

李瑞鍾等纂修 「常山縣志」 六十八卷首一卷末一卷、光緒十二年

黄壽祺修 「玉山縣志」 十一卷首一卷圖一卷、同治十二年

王恩溥修・李樹藩等纂 「上饒縣志」 二十六卷首一卷、同治十二年

張廷珩等修 「鉛山縣志」 三十卷首一卷、同治十二年

俞致中修・汪炳熊等纂 「弋陽縣志」 十四卷首一卷、同治十年
楊長傑修・黄聯珏等纂 「貴溪縣志」 十卷首一卷、同治年間
鄭浴脩等纂 「金谿縣志」 三十六卷首一卷末一卷、同治年間

○ 現代地方志類

常山県志編纂委員会 「常山県志」 浙江人民出版社、一九九〇年

玉山県地名弁公室編 「江西省玉山県地名志」、一九八四年

江西省玉山県志編纂委員会 「玉山縣志」 江西人民出版社、一九八五年

江西省上饒市地名弁公室編 「江西省上饒市地名志」、一九八六年

上饒県志編纂委員会 「上饒県志」 中共中央党校出版社、一九九三年

江西省上饒市信州区地方志編纂委員会編 「上饒市志」 方志出版社、二〇〇五年

○ 〇〇五年

鉛山県志編纂委員会編 「鉛山県志」 南海出版公司、一九九〇年

江西省弋陽県地名志編輯部編 「江西省弋陽県地名志」、一九八四年

弋陽県志編纂委員会編 「江西省弋陽県志」 南海出版、一九九一年

貴溪県地名弁公室編 「江西省貴溪県地名志」、一九八七年

貴溪県志編纂委員会 「貴溪県志」 中国科学技術出版社、一九九六年

金溪県人民政府地名弁公室編 「江西省金溪県地名志」、一九八六年

金溪県志編纂領導小組編 「金溪県志」 新華出版社、一九九二年

金溪県志編纂委員会編 「金溪県志」 三秦出版社、二〇〇七年

○ 山岳概説書

龔国光他編 『丹霞亀峯 奇絶江南』 百花洲文芸出版社、二〇〇〇年

丁新権他編 『龍虎山和亀峯』 江西科学技術出版社、二〇〇九年

周佐明他編 『丹山碧水 虎踞龍盤』 百花洲文芸出版社、二〇〇〇年

周佐明他編 『暢游 龍虎山』 百花洲文芸出版社、二〇〇二年

● 地図類

○ 陸軍参謀本部陸地測量部地形図

● 五万分一図

「灰埠」「玉山縣」「沙溪街」「八都街」「上饒縣」「楓嶺頭」「横峯縣」「貴

溪縣」「塘灣」「鷹潭」「上清宮」「瑤下積」「金谿縣」「潯灣」
・十万分一図

「玉山」「上饒」「横峯」「貴谿」「金谿」
・東亜五十万分一図
「廣信」「建寧」「南昌」「建昌」

○徐霞客遊記関連図

丁文江撰『徐霞客遊記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年
褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地圖出版社、一九九一年

○その他の現在市販の地図

『中国歴史地図集』第七冊（元 明時期）中国地圖出版社、一九八二年
『江西省地図冊』中国地圖出版社、二〇一〇年
『江西及周边省区公路網地図集』中国地圖出版社、二〇一三年
『龍虎山導游図』海潮攝影芸術出版社、二〇〇九年

○インターネット上の地図類

百度 BAI-DU

Google Earth